相手意識

校　長　　武井　正明

私は事ある毎に「相手意識」と教職員の皆さんにも、君たちにも呼び掛けています。
しかし恥ずかしながら校長という立場なのに、相手意識を欠いてしまう未熟な自分を反省することが、いまだにあります。その度に自己嫌悪です。

「相手意識」を強く感じたのは、単身赴任で赴任した中学校で、初めて特別支援学級の担任をした時のことです。受け持ち生徒は３年男子と１年の男子の僅か２人の学級でした。
特に好きだったのは、介助員の方と４人で一緒に食べる給食の時間。「ボク、〇〇好きなんだな」「僕も好きだよ。先生は？」「先生もこれ好きだねえ、旨いよねえ」なんて会話を交わしながら食べる給食時間は、本当に楽しいひとときでした。本当に美味しそうに食べるふたりが可愛く、癒されたものです。
私は彼らから、たくさん教えてもらいました。嬉しい時は思い切り喜べばいい。悔しい時は心から悔しがり、アタマに来た時は怒りを隠さなくてもいい。そして、自分が悪いと思った時は素直に「ごめんなさい」と謝る。たった１年の担任でしたが、彼らから大事なことを教わりました。３年の彼が卒業を控えたある日、細やかなお別れ会をやろうと言ったら彼は「嫌だ嫌だ。絶対に嫌だ‼」と言って聞きません。私が「なんで？」と訊くと一言「寂しいから」…それを聞いた瞬間、思わず胸がいっぱいになったものです。

年度初めは特に学級配布物が多くなります。当然、特別支援学級も同じです。しかし、これが度々忘れられてしまいました。
最初は言うのです。「すみません先生。うちの学級の分も配布物お願いします」
「あっ、すみませーん。今度から気をつけます」「こちらこそすみません」
暫くすると同じことがまた起こります。「あのお…配布物なんですが…」「ああ、すみませんでした。また忘れてました」「すみません、よろしくお願いします」
そして今度配り忘れがあると、もう言いません。言っても無駄だと諦めるのです。自分が数に入れられていない、というのは悲しく残念なことです。相手に悪気がなければ尚更です。やった方は憶えていません。やられた方は憶えています。

でもハッとしたのです。これまでの自分はどうだったのか。
これまで勤務してきた学校で、いつも忘れられていた彼らの気持ちになったことがあったのか。「それくらい」と軽く済ませていなかったか。

私は今、校長という立場を戴いています。
だから尚更、私を見ている側の立場から、という目線を忘れてはなりません。
それでも欠いてしまうのが「相手意識」です。本当に大事な意識です。